

子育てと子育て支援のあり方に関する心理学的考察

A psychological study of the ideal method of child care and child care support

米澤 好史

Yoshifumi YONEZAWA

(和歌山大学教育学部心理学教室)

現代の子育ての難しさとその意義について心理学的に考察し、子育てと子育て支援のあり方について論じる。まず、子育てが現代の課題であり、こどもたちの変化を環境の中で理解すべきであることを指摘し、こどもと子育て中の親世代の変化の分析を行った。そして、「キレる」こどもの分析を通して、こどもとのかかわり方の意味を「受容の行き違い」の観点から再検討し、心理的存在と物理的存在という視点の重要性を指摘した。こどもとのかかわり方については、認識システムの限界をふまえ、視点意識を育む必要性を説いた。更には、子育て観変換の必要性の観点から、子育ては個育て・互い育てであることを指摘し、関係性を重視したコミュニケーション支援という視点からの分析を行った。そして、子育てと子育て支援の相似性について言及し、子育て支援における「つながり」の重要性を指摘した。

キーワード：子育て・子育て支援・発達支援・視点意識・コミュニケーション支援・問題行動への対応

1. 子育て環境と子育て支援

1.1. 子育てという問題

最近、少子化の問題とともに、子育ての質の問題も提起されている。少子化については、内閣府(2003)の国民生活白書でも指摘されるように、合計特殊出生率が2001年で1.33と減少を続け、2003年には少子化社会対策基本法が制定・施行されるに及んでいる。

問題は、少子化にとどまらず、子育てにおける様々な問題、すなわち児童虐待・育児不安等の増大にもある。児童虐待については、厚生労働省(2003)の福祉行政報告例では、児童相談所で取り扱った虐待相談ケースが平成14年度で23,738件と報告されている。それによると、身体的虐待が最も多く10,932件、ついで養育怠慢・拒否であるネグレクトで8,940件、心理的虐待が3,046件、性的虐待は820件となっている。平成2年度は1,101件であったのと比較してその増加ぶりが顕著である。また、児童虐待の防止等に関する法律が2004年には改正公布されている。

こうした数字は、真に増加した部分と隠蔽・無視されていたものが顕在化した部分があるだろうが、親世代の育児困難観や育児不安の増加という背景的要因を見逃すことはできないだろう。内閣府大臣官房政府広報室(2002)の国民生活に関する世論調査報告では、子育てのつらさとして、金銭面の指摘が43.9%

と第一位であるが、体力・根気の必要性34.5%、自由な時間がなくなること31.0%、接し方がわからない21.0%、働けない19.0%という心理的理由が多く出されている。

内閣府(2001)の国民生活白書では、1997年度の国民生活選好度調査より、子育てに自信がなくなることがある母親は、専業主婦で70.0%、共働きで46.7%、自分のやりたいことができなくてあせる母親は、専業主婦で74.0%、共働きで70.0%、イライラする母親は、専業主婦で78.7%、共働きで86.6%と報告されている。専業主婦が自信をなくして落ち込み、共働きの母親はイライラしている現状が見て取れる。対象が一つしかない場合、その枠組でしか考えられないため途方感が生じ、対象が二つ以上ある場合、その両方に引き裂かれる思いがイライラにつながる心理状態を反映している。内閣府(2003)の国民生活白書でも、2003年度の若年層の意識実態調査より、同様に、育児の自信がない母親が63.3%、自分のやりたいことができなくて焦るが63.9%、イライラするが75.2%と報告されている。

内閣府大臣官房政府広報室(2002)と同(2003)で、家庭の意味を問うたところ、団欒が60.2%から59.6%と微減傾向、家族の絆を強める場が45.1%から47.9%と微増している。家庭の機能の変容・低下と危機感が表れていると言えよう。家庭の場意識、育児意識が

かなり変化・動揺している現状が指摘でき、子育てそれ自体が解決を必要とする現代的問題、課題となつて来ている現状を認識する必要があると言えるだろう。

1. 2. 子育ては誰の問題かー親世代が抱える問題ー

現在、子育て中の親世代が抱える問題を整理してみよう。第1に、現代の情報化・複雑化した社会では、親役割が相対化し、親の影響力が否応なしに低下しているというハンディが指摘できる。以前は、情報は殆ど親を通してこどもに伝えられ、そのコントロールも容易であったが、現在は、インターネットや各種メディアによって、親が知らない間にダイレクトに情報がこどもに伝えられる可能性が高く、親がコントロールできない場合が多い。第2に、親自身も友達親子、ものわりのいい親を演じることを目的とし、しかも本人自身が、自らへの関心と固執を持ち続け、終わらない自分探しの旅の途中であるという点が挙げられる。終わらない思春期、終わらない青年期とも言える現象（斎藤，1999等）は、現代親世代の特徴でもあり、大人になりきらない親が子育てをしているという現状認識が必要である。「自由な時間がなくなり自分のしたいことができない」という育児の悩みがそれを証明している。米澤（2002）では、現代若者の思考様式の特徴を分析し、確証バイアスにより、自己本位で恣意的な思いこみ、とらわれが強いことを示した。異なる他者ときちんと向き合うことが苦手な人には育児が精神的重圧となり、自分の自由が奪われると対立的に捉えやすくなるのである。

こうした親世代を育てた側の問題として、第3には、こどもを育てたくない心理の背景に子育てや生と死について真摯に学ばない学校教育に原因を求めることができる（米澤，2000参照）。死をタブー視し、死と直面しない教育と無理に死と直面させようとする試み（米澤，2002）という取り組みの極端さもさることながら、子育てについて学ぶカリキュラムも貧弱であることが重大な問題である。今、親世代に育てられ、学校で学んでいるこどもたちは、次の親世代となっていく。そのこどもたちに十分な子育て学習ができていると言えるだろうか。更に、第4には、子育ての因果連鎖が指摘できる。児童虐待を行う親自身も子どもの頃に自身の親から虐待を受けていたことが多いという事実にとどまらず（長谷川，2003等）、そもそも親自身が子育てを行うとき、自身の育てられ方を否応なしに意識し、それにとらわれるということを確認しなければならない。親にされたようについしてしまうこと、逆に親にされたことが嫌でその反対をすることに固執してしまうことが多い。このように親世代の問題は、親世代を育てた世代の問題としても意識されなければならない。

しかるに、親世代とそれを支援するその親世代（旧

親世代）の間には、子育て意識や子育て観の違いが断絶の要素として存在する。核家族化により、同居が減り、親世代は知識としては育児本等に頼り、労力としては旧親世代をあてにするというねじれ構造や、旧親世代も自身の育児観を押しつけることによる世代断絶への恐れから、十分な交流ができていないとは言えない。また、子育ての学び方、教え方、支援のあり方についても我流が多く、きちんと位置づけられてはいないため、効果的な子育て支援にとまどう場合も多い。こうした世代間の交流の貧弱さが第5の問題としてあげられる。子育ての問題は、全世代の課題として改めて意識されねばならない問題なのである。

2. こどもたちの変化をどう捉えるか

2. 1. こどもの変化の特徴

現代のこどもの特徴をキーワード的に羅列すると、「キレやすく」「傷つきやすく」「向き合えない」「殻にこもる」こどもたちと表現できるだろう。こうしたこどもたちの変化の理由として、米澤（2000）は、心理的耐性のなさを挙げ、こどもの心の器の弱さとそれを壊す力の存在の2面から考える必要性を指摘した。こどもの変化は環境の変化との相互作用で捉えていく必要がある。

臨床教育研究所「虹」（1999）は、保育所に通うこどもの特徴として、「あいさつしない」「部屋に入るといきなりたく」「疲れたとすぐ言う」「できないことはやらない」「みんなでやるのが苦手」「思い通りにならないとパニック」「先生を独占したがる」「声をかけると固まる」等をあげ、その親の特徴として、「こどものことより自分のことを話したがる」「面倒なことはさける」「こどもとゆっくりかかわるより遊び重視」「こどもを叱れない」「こどもとは友達感覚」等を挙げている。親子の変化は相互作用的であり、それを許容している社会の変化を見て取れる。

木下（2003）は、自我の育ちが幼く、自己コントロールができない現象を「2歳児みたいな4歳児」と表現している。些細なことでパニックを起こしやすく、普段は必要以上にべたべた甘えているという特徴がある。こういうこどもはごっこ遊びでの役割にも特徴があり。以前はお母さん役が圧倒的人气だったママゴト遊びでもペット役や赤ちゃん役を好むという。このことは、空井（2000）がCATにおいて、かけっこの場面で、以前は転けたこどもを振り返るこどもを主人公にしたのに、最近、転けたこどもを主人公に物語りをするこどもが増えたと報告していることと相通じるものがある。育ちきらず、癒されたいこどもたちの存在が指摘できる。こどもは、いわゆる反抗期を2回経験する。2歳児みたいな4歳児とは第1次反抗期のごまかしを意味する。それは、自分と出会い直す機会であ

る第二次反抗期での更なるごまかしの再来増幅につながり、終わらない青年期の原因ともなる。

きちんと自分に出会い、自分に気づくという自己意識の育成が不十分であり、そのことが自分探しを希求する原因にもなっている。しっかりと自分を見つめないうために、どこかにある本当の自分を捜し求め続けるのである。こうした自分探しととらわれの問題は育児の問題と深く関わっている。子育てされる側もする側も自分にきちんと向き合っていないまま、よく似たとらわれに終始しているのである。土肥（1998）によると、男らしい女性は23%、男らしい男性は22%、女らしい女性は21%、女らしい男性は19%という報告をしている。ジェンダーへのとらわれも、実際に存在しない「男は男らしい」「女は女らしい」という幻想にとりつかれ、押しつけている面がある（他のとらわれについては、米澤、2001a；2002 参照）。

2. 2. 現代若者像の分析

現代若者像については、制度としての自由が成立したのに対して、その自由を使いこなす個が育っていない現象として捉えることができるだろう。表1に少年事件として記憶に生々しい問題化したものを列挙した。総じて、よく理解していない自分という殻に閉じ籠もりがちな少年の典型像が見られる。

表1. 最近の主な少年事件

2003. 11	河内長野両親殺傷事件（大学生と高校生）
2003. 7	小6児童監禁事件（渋谷・赤坂）
2003. 7	長崎児童殺人（中1）
2001. 5	武蔵村山市西武遊園駅列車内殺人 「ちょっとつめてください」
2000. 5	西鉄バスジャック事件
1999. 12	日野小事件→2000. 2 自殺
1998. 1	栃木県黒磯市中学校教師刺殺事件
1997. 5	神戸サカキバラセイト事件

こうしたことは、一般的な現象でも指摘できる。最近の成人式の荒れ、人前で化粧する・食べる・座り込む、茶髪やピアス等の自己装飾、フリーター等がそうである。人前で座れないという多動傾向は、裏を返せば人前で座り込むという行動につながる。情報への特異な反応性ともいうべきで、強制された座りは拒否するが、自分の居場所を確保する座りにこだわっているのである。こうした情報への反応性は、情報依存性が原因にもなっている。ウォークマンという道具は集団にいながらにして自分一人の世界を構築しそこに逃げ込むことを可能とした。携帯電話は、そこにいながら、いない人となつがりそこに逃げ込むことを可能とした。しかもその関係性は、自分にとって特別な関係を意識できる。したがってそれら道具への依存性は益々増幅される。携帯を通してつながることの価値が高まり、メ

ールアドレスを教えたのにメールが来ないことを不安に思う気持ちも増幅する。殻にこもりつつも、特別な関係には、つながりたいという気持ちの表れであろう。一般的なつきあいという概念は彼らには薄いのである。茶髪等の自己装飾は、自分という逃げ場所の構築に他ならない。そうした自己装飾に依存した形でしか存在できない不安定さを示している。

今の若者に共通して言える特徴は、何かに反対するより、むしろ無関連な反抗ともいうべきものにあると言えるだろう。対象を理解した上での反抗ではなく、感性的・反応的に反抗している部分が多いのである。ここにも理解の希薄さが見て取れる。そうした自分と向き合えないことから来る、殻にこもるといった感性的居場所づくりは、きちんと何かとつきあうことを避けるため、傷つきやすい、キレやすいという現象と共存するのである。

3. 受容の行き違い

3. 1. 愛情不足の意味

こどもを受容することは、本来、こども自身の自己意識の育成に寄与することが重大であるはずである。こどもに愛情をかけるかどうかが問われ、こどもを受容したかどうかを重視する議論は、ともすれば本質を見失うことになりかねない。「キレる」現象を取り上げて、このことを検証してみよう。国立教育政策研究所（2002）は、654例を対象に「キレる」こどもの原因を分析したところ、家庭での不適切な養育態度が最も多く（76%）、ついで家庭内の緊張状態が多かった（64%）。不適切な養育態度としては、多い順に、過度の統制・放任・過保護・過干渉・過度の要求・言いなりが挙げられた。これはどう考えればいいのか。調査が家庭に責任を押しつけるバイアスを持って行われているとの指摘もあり、結局、極端な育て方はまずいとの理解しかされなかった部分もある。しかし、この報告で示された養育態度は、放任・過保護、強制・言いなりのように相反する養育態度が問題視されている。このままではどう接して良いか戸惑うところである。しかし、これはどういう養育態度がいいのかという問題意識そのものが間違っていることを示しているのではないだろうか。どう関わったのではなく、こどもにどう受け止められたかが問われねばならないのである。親が放任してもそれを自主尊重と受け取ったこどもはキレないが、それを自分は愛される価値がないのだと受け取るキレる、親が言いなりにしてくれることで自分を認められたと感じるこどもはキレないが、親は自分のことがどうでもいいのか何でもウンというたと捉えたこどもはキレるのである。過度の要求や期待も励みに受け止められる場合もあれば、重荷と感じられることもある。

愛情不足とは、親が愛情をかけていないという意味ではない。こどもが愛情を感じられないという意味である。こどもが愛情を駆けて欲しいときと思っている時をはずせば、後でいくら愛情を注いでも受け入れる口は固く閉ざされているかもしれないのである。これを受容の行き違いと呼ぼう。藤田・谷脇（2003）は、親がこどもの自己主張や自己抑制を期待して養育してもこどもの自己主張・自己抑制を育てないことを示している。また、二重拘束という現象が知られているが、親が怒っているのに表面上平静を装う態度は、こどもにとってわかりにくく親の愛情理解に混乱を招きやすい。こうした意図の行き違いは、親が自分の意図をすべてコントロールした形で呈示できず、さまざまな行動を示してしまうためと、こどもが自分の認知的枠組みに合うものしか取り入れないというコミュニケーションの落とし穴から生じるものと言えるだろう。

3. 2. 心理的存在と物理的存在

親子関係の分析においても、上記の観点から、親環境とこどもの受け止め方という視点が重要である。従って、親の養育態度や育児環境がダイレクトにこどもに多大な影響を与えるという視点は注意して扱う必要がある。高田（2000）は、いくつかの親子関係研究をレビューしている。それを参考に、親子関係の偏見について検討してみよう。

1) 非行化と関係あるのは、母親の就労率や家族構成（両親がそろっているか）ではない。

就労率や家族構成という形式的環境が子育てに関与しているという偏見は根強いが、ダイレクトにこどもに影響することはないのが事実である。こどもがこの環境をどう受け止めたかによって決まってくるのである。

2) 就労している母をもつこどもは、それを不満に思ったり、寂しがっていない。

就労するかどうかを迷う母親やいわゆる専業主婦であることがこどもへの愛情の証であると考えた人は、就労している母親のこどもは一樣にそれを否定的に捉えていると思いがちである。しかし、逆に、就労している母親のこどもはそれを肯定的に捉えていることが多い。ただ、注意しなければいけないのは、この肯定には、親のしていることに否定的考えをもともとこどもは持ちにくいという傾向を考慮すべきだということである。無理に母親の就労を肯定しようとしているこどももいるのである。

3) 就労している母をもつこどもは自主性が高いわけではない。

こどもの自主性を高めるためにわざわざ就労し、こどもを保育所に預ける親もいるが、これは本末転倒も甚だしい。母親が就労したからといって、そのことがダイレクトにこどもの自主性を高めるわけがない。もしそうなら、放任すればすべてのこどもは自立するこ

とになる。また、就労している母親がそのこと自体に否定的な場合は、こどもにもそれが伝わって自立を妨げることもある。母親自身の自分の親からの自立やこどもからの自立の問題も関連してくる。母親自身が自分の自立のために就労することも少なくないが、それをこどもの自立のためとすり替えることも多々ある。

4) 性役割観は就労していない母を持つこどもの方が固定的であるわけではない。

これも就労の有無という外的環境の影響を過大視してはいけないということである。

5) 社会的発達や探索心に影響を与えるのは母親の方である。

こうした社会性、探索心を父親の影響と捉える偏見もまだまだ多い。むしろ父親は、運動・言語の発達に影響すると言われている。探索心は基本的信頼感に基づく安心感を背景にしている。探索基地としての母親の役割は、見知らぬ人に会った時、母親に隠れたりした後、母親と接触しつつ見知らぬ人と関わる行動にも見られるものである。

6) 母親の育児不安は父親の子育て参加程度、こどもの数、母親の年齢と関係がない。

母親が育児不安になるかどうかと、父親が子育てに参加しているかどうかとは関係がない。母親が育児不安になるかどうかは、母親自身が父親は育児に参加してくれていると思っているかどうかと関係があるのである。「そこにいる」「行動した」という物理的存在自体が人間にとって意味を持つのではない。「そこにいることを意識した」「行動したことを意識した」という心理的实在性が重要なのである。母親もこどももそういう意味では同じなのである。こどもが愛情を感じられるかが肝心なのであり、母親が父親の存在を感じられるかが大切なのである。こうした心理的实在性は人間関係にとって重要な働きをする。実際にそばにいても心がそばにいないことも多い。そばにいても離れていても存在を実感できる心を育てることが大切なのである。

4. 子育て支援のあり方

4. 1. こどもを親を隔てるもの一認識システムー

子育てを分析する場合、3. 1. でも指摘したように、親子のコミュニケーションという視点が必要である。だとすれば、そもそも親・子に共通する認識システムについて押さえておく必要があるだろう。親も以前はこどもであった。それなのに、なぜ、親は、こどもの気持ちがわからなくなるのだろうか。こどもは親の思いをなぜ理解できないことが多いのだろうか。その答えは、認識システムにある。米澤（1994）、米澤・米澤（2003）では、この認識システムの限界を学習指導に生かす視点を提供したが、同じことが、子育てについても言えるのである。人間は、ボトムアップ処理

を苦手とし、トップダウン処理を得意とする認識システムを持っている。トップダウン処理とは、概念駆動処理ともよばれ、既有知識に依存して概念や理論などから駆動され、入力データを予想や仮説、期待などのもとに処理するもので、ボトムアップ処理とは、データ駆動処理ともいわれ、入力データによって駆動され、それを処理するスキーマを見出し、概念や枠組に取り込むものである (Norman & Bobrow, 1976)。

既に知っている親にとっては自明のことでも、こどもにとっては経験していなければ、答えを知らなければ、わからないことは多いのである。こどもはわからない状態で先のことを念頭に行動しようとしても無理なのに、親は既に知っているために「なぜこんな簡単なことがわからないのか」とこどもの未熟さを責めることになり、その溝は深まってしまう。更に、問題なのは、既にわかってしまった親は、わからない頃の認識に戻れないという点である。トップダウン処理によって答えから認識への道筋をつけてしまうと、それ以外の解釈を許容しなくなるのである。このことは、たとえば、Frisby (1979) の「馬に乗った絵」を体験すれば実感できる。馬がいてと教えられ、馬が見えてしまった瞬間、もう何にも見えなかった見え方に戻れないのである。つまり、解釈・理解とは排他的選択なのであり、わからないものはわからないし、わからないには戻れないのである。こどもの気持ちに戻れないのはそのためなのである。この点は、親の子育てを支援する場合にも適用できる。子育て支援者には自明なことをいくら大切だと親に伝えてもわからないのもそのためである。子育て支援者は細心の注意をしても、子育て中の親の気持ち、見え方にはなかなか戻れないで、必要以上に傷つけたり、逆に甘やかしてしまう理由もここにあるのである。

一方で、てっとり早い育児法や支援法が求められている。こうした方法を欲しがる心理についても以前考察したが (米澤, 1994; 2001b; 2002)、方法だけを求めても理解できないのも認識システムの特徴である。方法の持つ意味、目的をどのようにして実感できるか、まだ経験していない目標をどのように意識できるか、子育て支援をする場合にも、このことは十分配慮すべき点であろう。子育てに目標はないと明言することは簡単である。目的論的に子育てを手段化することはいいとは思えない。しかし、目標がないということを親はどのように受け止め行動するか、無目的のためにそれぞれの行動の意義を考えなくなり、おざなりな行為に終始することも少なくない。短絡的目的でもなく無目的でもない行動の意義を捉える視点が必要なのである。

4. 2. しつけ言葉の意味

村石・関口・安見 (1995) は、俗信的しつけ言葉の使われ方について研究している。それによると、使わ

れなくなったしつけ言葉と増加しているしつけ言葉があるという。「ごはんをこぼすと目がつぶれる」「ごはんを食べてすぐ寝ると牛になる」は減少し、「男の子は泣くな」「自分のことは自分でしろ」は増加している。差別的なしつけ言葉や現実感がなく今のこどもを信じさせることができないものは減少しているが、相変わらずよく使われるしつけ言葉が少なくない。

現実感の乏しいファンタジー性のあるしつけ言葉では見逃してしまうしつけ言葉の本質は、こうした直接的言い方のしつけ言葉を目の当たりにするとよくわかる。親の言うことを簡単に脅して信じ込ませる、なぜそうなのかは問わせないという性質である。これは行動の抑制には効果を示すだろうが、子ども自身が自ら考え、なぜそうすべきで、なぜそうしてはいけないのかを考えるチャンスを奪っている思考停止現象に他ならない (米澤, 2002)。みかけおとなしいから良い子であるとか、外見上、良い子に振る舞うことを求めることが、本当に良いしつけなのだろうか。いろいろなタガがはずれた現在の子育て混乱ぶりを見るにつけても、みかけだけのしつけではないものを追求すべき必要性を痛感する。今又再び、厳しい規制をかけて、こどもにみかけのしつけをするのが本当にいいのかを考えねばならない。自らを自らが律する自己コントロールは、決してがまんさせることから生じない (米澤, 2000)。しつけ言葉にも実は背景にいろいろな理由や思いが存在する。それを一緒に考えることこそが必要なのであろう。

同様に、けんか両成敗のような平等裁き、兄がいつも叱られる、というような固定的介入では、こども自身がけんかや問題から学ぶことが少ない。却って事情を聞いてもらえなかった不満やいつも型どおりなことへの不平等感(どちらが悪くても両方悪いというのは、形としては平等だが、状況に即応していない意味では不平等・不公平である)を残してしまう。親はもう一度、働きかけの意味を踏まえて、子ども自身が考えられる介入を心がけるべきだろう。

4. 3. 自己意識・他者意識と問題行動

今度は、こどもたちの側の問題点を分析してみよう。こどもたちが抱えている多くの問題は、ストレスと密接に関連している。いじめ、学級崩壊、家庭内暴力、不登校、しかりである。たとえば、いじめは、誰でも良いからストレスを解消したいという攻撃性が表れたもので、本質的問題を抱えているのはいじめているこどもの方である。いじめる対象は誰でもいい。いじめた理由として、いじめられた子について指摘される理由も作られたきっかけの理由に過ぎない。主因はいじめているこどもの抱えているどうしようもないストレスである。そしてそれをストレスを抱えた傍観者がカタルシス (いじめを見てストレス解消) と保身のため

に（自分がいじめられないように）助長しているのである。だから、この問題は結果として、学級崩壊につながった。いじめっ子への対応が遅れたため、大勢が一斉にストレスによる行動を起こさざるを得なかったのである。しかも、こうした問題は起きやすいところである。厳しい先生よりやさしそうな先生の場合で起こりやすいのもそのためである。厳しい先生へのストレスが次年度の優しい先生の場合なら、出してもいいのだという形であふれ出ることもある。こうした場合、だから厳しい対応がいいという意見は、全く間違った評価である。いずれあふれ出るストレスを一時しのぎで制止することは、外見的しつけの最たるもので、根本的解決につながらないからである。

しかし、もっと根源的なものは、こどもたちの自己意識の不正確さ・歪み、他者意識の不正確さ・歪みにあるのではないだろうか。家庭内暴力は自己評価の低さにその一因がある。いじめも不登校にも同じことが言える。精神分析においては無意識の重要性が説かれているが、むしろ多くの人間は意識できる自己意識の大半に気づいていない、気づこうとしていない、誤解している部分が多いのではないだろうか。自信・自己効力感と自己高揚感を取り違える（米澤, 2001b）、茶髪について「だれにも迷惑をかけていない」という自己奉仕的な自己評価をし、それを認めてくれる他者だけを意識する他者意識のいびつさ（米澤, 2000）、自分らしさという答えを探し求め、足下の自己意識がおろそか（米澤, 2002）等の指摘をしてきたが、改めて、他者意識と自己意識の精度の悪さ、一種のとりわれによる恣意性が根本的な問題であると指摘したい。

そして、自己意識・他者意識の歪みは、しつけ言葉や平等裁きに代表される機械的、形式的なしつけによって助長されてきたのではないだろうか。こどもはこうすべきだ式のしつけでは、こどもは考えなくても、自己を見つめなくても、どうすればいいかの適当な答えは親が示してくれるのだから。そして、そうして育てられたこどもが親となり、更にしつけは形式化し、自己の感情にまかせた恣意性を帯びた理不尽さを呈してくると、親子の間に適切なコミュニケーションが成立しなくなる。お互いに殻にこもった同士の自己満足の営みが交差するだけになる。こうして更に自己意識のチャンスは奪われていくのである。最近、アイデンティティ論議が囂しく、その日本語表記にも議論があったところである。アイデンティティとは単なる帰属意識や独自性だろうか。どこかに所属しているだけでその人を規定してしまおうという安直な自己意識育成も、人と違っているから個性なのだという考え方も同じくらい自己を冒涇するものだろう。

不登校児に対する対応として、「そっとする」という対応が推奨され、最近その見直しがようやく為されつつある。いくら形式的にそっとしても、そのことが

本人の自己意識・他者意識への気づきにつながらなければ、何の効果もないばかりか、更なる心の殻を形成し、社会からの隔絶感を助長するだけである。不登校児の自己意識、他者意識への気づきを支援する働きかけなくして、不登校児が真に受容され、自己を受容することにはならないだろう。受容の本質議論（米澤, 2000）に加えて、本論の受容の行き違い論も踏まえ、本人の意識への気づきへの支援という観点を重要視すべき時期に来ていると言えるだろう。

危険な遊びについても考えてみよう。遊びは、そもそも学習の延長線上にあるもので、学び尽くした後に遊びはやってくる（Piaget, 1964）。それだけで珍しいというものには興味を示し、モデル学習も進みやすい。こどもがアクションアニメのキャラクターにあこがれる心理も同様である。しかし、そのうち真似ばかりではおもしろくなり、工夫をし出す。これが遊びである。遊びは実は高度な認知活動であり、本来、遊びを学習の導入に使うなどというのは本末転倒の邪道と言えるのではないか。ところで、危険な遊びはただ禁止すればいいのだろうか。遊びだからと無下に扱われがちだが、本来、なぜだめなのかをきちんと考えるチャンスが必要なのである。それは経験し、失敗してからでないと難しい場合も多い。失敗を直視し、失敗した自分をも直視することからすべては始まる。失敗したら意気消沈するのも自己意識が育っていない証拠であろう。ところがそうしたチャンスを設定すべき親自身が危険なことについて考えさせず、キャラクターショーでこどもそっちのけで盛り上がっているというのではないか。どんな働きかけも、気づきへの支援という視点を忘れてはならないのである。

5. コミュニケーション支援と子育て支援

5.1. コミュニケーション支援の必要性

子育ては個育てであり、育児は育自であるとよく言われる。子育ての担い手である親世代が自身の成長途中であるという理解を踏まえると、子育てと自分育てを排他的に考えるのではなく、子育てを通してお互いに親もこどもも自分育てをしていくのだという考え方が重要になってくる。子育てで自由な時間を奪われると考えるのではなく、自由な時間の生かし方が子育てになると意識するのである。そう考えると、子育ては素敵な親子のコミュニケーションということになる。子育てを通して親もこどもも真の自分自身に出会える機会を持つことができるのである。そのために重要な観点を紹介しよう。

第1は視点意識の育成である。Piaget & Inhelder (1956) の「3つの山問題」は、他者の視点を理解する力の発達を調べるための実験法として有名である。台座に置かれた三つの物質の山について子どもの位置

とは異なる位置から見ればどのように見えるかを調べるものである。幼児の多くが自己視点を他者視点と混同し（自己中心性）、この課題に完全に成功するのは9～10歳とされる。そして、実際に台座を動かして確認すると理解は早いが他の課題では応用できず、自分が動いて確認すると視点移動による混同のため理解が難しいが、一旦理解すると他の課題でも応用されるという。一方、Premack & Woodruff (1978) に始まる「心の理論」においても、他者視点意識がいつ芽生えるかは重要な研究視点である。Wimmer & Perner (1983) は、Aという男の子がチョコレートを手帳に隠した後、外出し、別の人間が別の場所に隠し直し、再び帰ってきたAはどこを探すかという実演課題を行い、4～6歳頃に半分以上のこどもが正しく答えられたと報告している。この場合、実際の隠し場所ではなく、Aにとってあると思っている場所を区別して理解できるかという他者の視点に立った理解が求められている。3つの山問題に比べて容易なのは、日常的課題であり、立つべき具体的他者意識が設定されている点にある。こうした視点意識研究によって、どのような経験とかわかりが視点意識を育むのかを研究していく必要がある。多くの他者意識研究は実験的で非日常的であり、また多くの自己意識研究も質問紙調査が多く実際の具体的自己意識像に迫っていない。更に実際の研究が求められている。子育てにおいても、親の自己意識、他者意識と視点意識、こどものそれをダイナミックに比較検討した研究が待たれるところである。

第2に、コミュニケーションとしてのこどもとのかわりとして、その方向性が重要である。一方的に親がこどもに話しかけている、逆に親はこどもの言うことに「うんうん」と言っているだけである、という状態は本来コミュニケーションとは言いがたい。こどもと向き合い、コミュニケーションを取ろうとして、こどもと抜き差しならない2者関係に陥り、うまくコミュニケーションできない場合も多い。ここで、コミュニケーションの基本に立ち返ろう。言語発達、コミュニケーション発達の指標として使われるものに共同注意 (Butterworth, 1995) がある。それには、単なる母親の指した方を見るというような、他者と同じ注意の方向を向く同時注視のみならず、一緒に注意を向いているお互いに気づく相互理解、その注意によって得た感情を共有する情緒の共有の3つの側面があることが指摘されている (田中, 2000)。他者の意図への気づき、意図の内容の理解ということが、第三項であるモノへの共同注意によって獲得されていく、これがコミュニケーションの発達なのである。

ことばの発達には自分－モノ－相手という三項関係が重要であると言われる (たとえば荻野, 1996)。こどもとコミュニケーションを深めるためには、第三項を設定し、それとの関係から親子関係を見つめ直すこ

とが必要なのである。そして、こうした指示行動や見つけ、気づきがコミュニケーションの本質であり、それらを伴わない言語だけの応酬は、コミュニケーションとは呼べないものなのである。英語力をつけるために、幼児に英語ビデオを見せる親が多くいる。しかし、こどもとビデオだけにするのはいかにもまずい。これでは三項関係は成立しないし、こちらの行為に反応してくれないビデオ映像では、英語の発音は伝わっても、共同注意も意図の理解もなく、コミュニケーションの神髄が伝わらない。得てしてこういうことを経験すると日本語の発語が発達的に遅れたりするのである。内田 (2002) は、テレビを受け身的に見ることが、こどもの主体性を奪う等、同様のことを指摘している。テレビが有無を言わせぬ興味喚起や注意誘導を行う場合、親が第三項として関与し、コミュニケーションとしてうまくコーディネートすることが肝要ではないか。そうすればこどもに与える情報コントロールも親によって可能である。そうでなくても、テレビはわざわざ台詞を視覚呈示したりして、大人の視聴努力を軽減化させると同時に、認知能力を鈍らせ (視覚呈示のない台詞を聞いただけでは理解困難になってしまう)、それを鵜呑みにすることで思考停止に至らせる危険性もある。モノに使われるのではなく、使いこなす形でテレビとつきあえば、情報入手等でも重宝なものであることに変わりはないはずである。

一方通行でない双方向性のコミュニケーションを保証するものに、佐伯 (1983) の指摘する双原因性感覚が挙げられる。佐伯は意欲の要素としても双原因性感覚の重要性を指摘しているが、相手によって自分が変えられ、自分が相手を変えたいという営みが、親子の間、教師とこどもの間で生じれば、それはすなわち双方向のコミュニケーションであり、コミュニケーションしようという意欲を育み、お互いがお互いによってより育つ

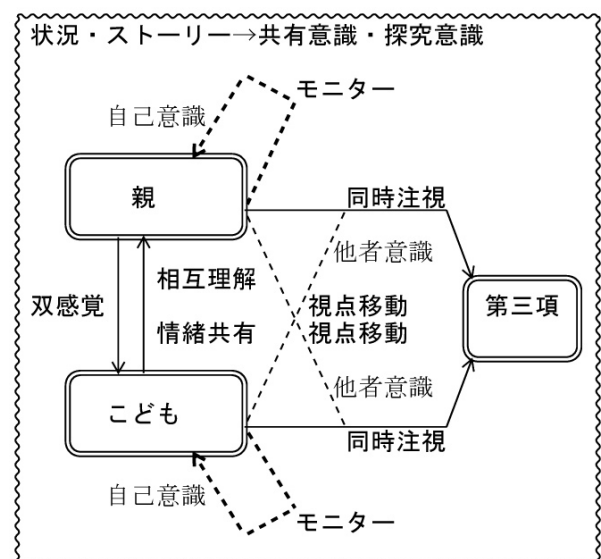


図1 コミュニケーションモデル

ていくことを意味する。これを双感覚性と呼ぼう。親がどんなにこどもに世話をしてくれても、一切、こどもから学ばない、こどもによって変わらない親であれば、こどもにとって魅力的とは言えないだろう。

以上のことを図1に、コミュニケーションモデルとして呈示した。子育ても教育も対峙伝達から並列交渉への転換が必要であり、そこでは、親子は同方向へと向かう探究同志である。そでは、共同注意・双感覚等が行われる。それらを支えている動力は、基本的には一緒に何かを分かち合っている、分かち合い続けたいという共有意識であり、絶えず発展しようとする探究意識、すなわち関係性に芽生えた意欲であろうと思われる。こうした環境において、見かけの向こう側を見る想像力、相手の立場に立つ感受性が養われていくのである。このような子育てコミュニケーションにおいて、親はこどものコミュニケーション・コーディネーターであり、子育て支援者は親子のコミュニケーション・コーディネーターであると言えるだろう。

こうした理論的枠組みは、自閉症児、ADHD児、LD児への取り組みにも応用できると考えられる。コミュニケーションに問題をもつこどもへの支援という意味でも、個々のコミュニケーション仕様に応じた支援が必要だからである。そして、健常児・障害児という枠組みではなく、どのこどもも特別であり、そのこども、こどもに応じた支援が必要であるという視点が大切である。それぞれのこどもの自己意識・他者意識を大切にしようという発想がないから、そして本人たちもその大切さに気づいていないから、「こどもにはこうすればいい」「こどもは教育されるものだ」という傲慢な発想が出てくるのである。こうした発想は既に見たように、こどもの受け止め方に鈍感な方法至上主義に墮するのみである。また、どの親にも通用する子育て支援という発想も同様に批判されるべきものである。

5.2. 子育て支援のあり方

このように、視点意識を持ち、共同注意、双感覚という場において、親子のコミュニケーションを図っていくことが大切である。それが親子が真に向き合うことであり、具体的コミュニケーションづくりがこどもと親との関係作りにつながる。子育て支援をする場合も、こどもとの関係作り、親との関係作りが重要なポイントとなってくる。支援者自身が親子関係の第3項となれるよう、こどもとの3項関係、親との3項関係を巧みに組み合わせたいけがいいのである。たとえば、親子関係を支援していく場合、支援者は、こどもの意識内、視野内に入るといったスタンスが有効である。直接話しかけても拒否されれば、関係作りに失敗する。それは3項関係のヒトとして対応するから、適切な第3項のモノが設定できないと関係は絶たれてしまうか

らである。そんな場合、自分を第3項のモノとして設定するのが、視野に入るというやり方である。そのうち、そして共通の第3項を持っているヒトとして意識してもらえよう行動するのである。これも直接向き合わない向き合い方の例と言えるだろう。

意図の理解に関して付け加えるならば、親の意図と反対のことをすることも健全である。なぜなら親の意図がわかっているから反対のことができるのである。親の意図と無関係ことをすることも注意しなければならない。親の意図を理解しようとすらししていない可能性があるからである。「勉強しなさい」「嫌」というよくある対応はまだ健全である。「勉強しなさい」「平気で違うことをしている」が危険なのである。こどもが親の意図に気づく、自分の意図にも本当に気づくための、環境作り、状況作り、場面作りが必要なのである。更には、こども自身が、躰いたところまで立ち返り、そこから一緒にやり直す支援も重要である。「12歳にもなって何てことしてんの!」ではなく、こどもとしてのやり残した地点からのやり直し、そうした軌跡をたどる支援が必要であり、それはとりもなおさず、親自身も親としてのやり直し、軌跡をたどることになる。12年を振り返りたどり直すのに12年はいらない。むしろ、その後ずっとそうしたことを引きずるより、もっと簡単に自分を取り戻すことができるはずである。そうした軌跡をたどる子育て支援においても、自己意識、他者意識は重要な機能を果たしてくるのである。

こうした働きかけは、米澤(2001b)で指摘した自己高揚感ではない真の自尊感情、自己効力感の育成についても当てはまる。こどもと同時に親の自己効力感を育てる子育て支援が必要である。その場合は、親子を巻き込んだ迫真的ストーリー作り・全体的コミュニティ作りが必要で、親育て・教師育て・こども育てが連環して行われる必要がある。そうした状況作りという支援と活動の中で学び、関係性の中で育てる主体性・意欲という視点が強調されなければならない。意欲はそのこどもの特性や資質ではない。何にでも意欲を感じるのは、本来の意欲ではなく、単に自己評価を上げるための道具でしかありえない。意欲は人とその対象との関係性の上に成立するものである。

このように、子育て支援は、子育て支援連鎖ネットワークの構築によって、更に充実したものにしていく必要がある。局所的・画一的支援から複線的・柔軟な支援へと、様々なニーズと親子関係に応じた支援が用意される必要がある。たとえば、金田(2002)は育児現場での専門的支援のあり方について論じている。それらも含めて、NPOと行政・専門家が手を取り合って、機能的な支援ができるよう、努力する必要がある。そして、支援された人が支援する人に育つ支援、こどもから旧親世代まで、世代を超えてつながる子育て支援

が望まれる。既に諸処で指摘したように、子育てと子育て支援の間には、互いの相似性が指摘できる。それぞれは入れ子のように関連し合っている。そうした連環の中に、様々な支援の輪が作られることが必要なのである。

6. まとめにかえて

以上の議論を「つながり」という観点から、もう少し掘り下げて説明しながら、本論をまとめてみたい。「子育て」として「つながり」が持っている重要性について再確認し、その「つながり」を育てていく方向性を支援していく必要があると考えられる。「子育て」には地域とそこに住んでいる人のつながりが支えになり、地域が支える、行政も支える、そうした基盤があって初めて、「子育て」は豊かになる。また、こうした横の「つながり」だけではなく、縦の「つながり」も「子育て」にとっては重要であることを指摘してきた。今、子育てをしている現役の子育て世代の「子育て」には、その人たちが自分たちの親世代によって育てられた「子育て」が少なからず影響している。そして、未来の「子育て」の担い手となる今のこどもたちの「子育て」にも、現在の「子育てのされ方」が影響している。こうした「つながり」の何を大切に伝え、何を断ち切っていくのかも重要な課題である。更に、自分の子育てを経験した人が現在子育て中の人の支援をするという「つながり」も、横と縦の「つながり」を結びつける重要な要素となるだろう。

「つながり」は、ただ何かと何かをつなげばいいというものではない。つなげられる個々の要素を大切にしていけることが何より重要である。その意味で、様々な個別のケースに応じてきめ細やかな支援が重要であり、個々の特殊なケースは決してその個別ケースにとどまらず、普遍的な意味を持っていることを再認識する必要がある。また、「つながり」が単なる連携や連絡にとどまるようではいけない。それぞれをしっかりと「つながり」として有機的・力動的につないでいくネットワーク、自ら発展、成長していくネットワークが必要である。その意味で生きたネットワークとそのネットワークの担い手の育成が必要である。そして、何より強調しておきたいのは、こうした「つながり」が「子育て」を支援し、育むことによって、子育てをしている大人もこどもも、それぞれに子育てを通して変わり、育っていくのである。異なる他者としてこどもとかかわり、他者理解・自己理解の難しさとその大切さを再認識することで、こどもを大切にすることは自分を大切にすることであることに気づき、こどもへの愛おしさは自分への愛おしさとして意識され、お互いがお互いを育て合っていることに気づいていけるのである。「子育て」は決して一方通行ではなく、双方

向の営みである。「子育て」を通して、私たちが忘れつつあった、人と人の「つながり」、地域の「つながり」が再構築される可能性も示唆される。私たちが育ててくれる「子育て」を通して、私たちの地域育てにつながるのではないだろうか。そうしたことを育む子育て支援でありたいものである。

引用文献

- Butterworth, G. 1995 Origins of mind in perception and action. In C. A. Moore & P. J. Dunham (Eds.) *Joint attention: Its origins and role in development*. Lawrence Erlbaum. Pp. 29-40.
- 大神英裕 (監訳) 1999 ジョイント・アテンションー心の起源とその発達を探るー ナカニシヤ出版.
- 土肥伊都子 1998 男性性・女性性の規定モデルの実証的研究 IBU 四天王寺国際仏教大学紀要, 30, 92-107.
- Frisby, J. P. 1979 *Seeing: Illusion, Brain and Mind*. Roxyby Press. 村山久美子 (訳) 1982 シーイング: 錯視ー脳と心のメカニズムー 誠信書房.
- 藤田尚文・谷脇のぞみ 2003 親の養育態度と幼児の自己主張・自己抑制の関係 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 324.
- 金田利子 2002 現場での支援 藤崎真知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆 (編著) 育児・保育現場での発達とその支援 (日本発達心理学会企画/柏木恵子・藤永保監修シリーズ臨床発達心理学5) Pp. 15-27.
- 木下孝司 2003 「生活」という単位でみた発達理論と支援 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, S 20.
- 国立教育政策研究所 2002 「突発性攻撃的行動及び衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究ー「キレる」子どもの成育歴に関する研究ー 国立教育政策研究所研究報告書 (研究代表者: 富岡賢治).
- 厚生労働省 2003 福祉行政報告例.
- 長谷川博一 2003 たすけて! 私は子どもを虐待したくないー世代連鎖を断ち切る支援ー 径書房.
- 村石昭三・関口準・安見克夫 1995 幼児に対する「しつけ言葉」の研究 (1) 日本保育学会第48回発表論文集, 680-681.
- 内閣府 2001 平成13年版国民生活白書: 家族の暮らしと構造改革.
- 内閣府 2003 平成15年版国民生活白書: デフレと生活ー若年フリーターの現在ー.
- 内閣府大臣官房政府広報室 2002 国民生活に関する世論調査
- 内閣府大臣官房政府広報室 2003 国民生活に関する世論調査
- Norman, D. A. & Bobrow, D. G. 1976 On the Role of Active Memory Process in Perception and Cognition, Cofer, C. N. (ed.), *The Structure of Human Memory*. Freeman.

- 荻野美佐子 1996 言語の発達 大村彰道（編）教育心理学Ⅰ－発達と学習指導の心理学－ 東京大学出版会 Pp.19-42.
- Piaget, J. 1964 滝沢武久（訳）1968 思考の心理学－発達心理学の六研究－ みすず書房
- Piaget, J. & Inhelder, B. 1956 *The child's conception of space*. Routledge & Kegan Paul.
- Premack, D. & Woodruff, G. 1978 Does chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526.
- 臨床教育研究所「虹」1999 乳幼児期の子どもの変化－学級崩壊の背景調査－ レインボーレポート2.
- 佐伯胖 1983 「わかる」ということの意味－学ぶ意欲の発見－ 岩波書店.
- 斎藤環 1999 社会的ひきこもり－終わらない思春期 P H P 研究所.
- 空井健三 2000 いわゆる”キレル”行動を心理学的に考える－臨床心理学の立場から－ 日本心理学会第64回大会発表論文集, S 16.
- 高田洋子 2000 未成人子の親子関係研究のレビューと課題－実証研究を中心に－ 神原文子・高田洋子（編）教育期の子育てと親子関係 ミネルヴァ書房 Pp. 3-26.
- 田中信利 2000 こころの共有と理解－共同注意がもたらすもの－ 保育者と研究者の連携を考える会（編）保育における人間関係 ナカニシヤ出版 Pp. 24-25.
- 内田伸子 2002 テレビ視聴の影響－弊害を抑えることはできるか－ 岩立志津夫・小椋たみ子（編著）言語発達とその支援（日本発達心理学会企画／柏木恵子・藤永保 監修 シリーズ臨床発達心理学4） Pp. 114-117.
- Wimmer, H. & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 米澤好史 1994 学習指導に認知心理学を生かす(1)－認知心理学から見た学習観－ 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 4, 159-169.
- 米澤好史 2000 こどもと向き合い、生きる力を育てる育児と教育 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 10, 1-20.
- 米澤好史 2001a 思考 米谷淳・米澤好史（編著）行動科学への招待－現代心理学のアプローチ－ 福村出版 Pp. 192-207.
- 米澤好史 2001b 生きる力を育てる子育て環境と学習環境の構築 和歌山大学教育学部教育実践総合センター 紀要, 11, 101-110.
- 米澤好史 2002 論理的思考力と非科学的信念－学力低下論を批判する－ 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, 75-88.
- 米澤好史・米澤稚子 2003 教育環境における「学習の場」理論の提唱と実践 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 37-46.